

つながりの中でくらす
望まれた人として生きる
自分らしく生きていく



No. 12

2007年5月発行

「地域生活サポートネットほうぷ」は、NPO法人設立3周年を
迎えました。みなさまの温かなご支援ご協力に感謝いたします。

今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

3周年記念号

-  NPO法人地域生活サポートネットほうぷは、
福祉・教育・医療の専門職が中心となって、2004年4月に設立しました。
大阪市旭区とその近隣地域に密着した地域福祉活動を行なっています。
-  地域に暮らす方々の視点から、誰もが希望をもって暮らすことのできる
地域社会、誰もが望まれた人として生きることのできる地域社会を目指し
て、あなたと共に考え行動します。
-  さまざまな団体や個人とつながり、福祉、医療、教育とのネットワークを
創りながら、1人でも多くの方が、地域でより豊かな生活を営むことが
できるようサポートします。

< 目次 >

ほうぷ 3年間のあゆみ	p. 2
3周年記念シンポジウムのご案内	p. 5
スタッフからのメッセージ ～感謝を込めて～	p. 6
ボランティアからのメッセージ ～期待を込めて～	p. 9
参加者募集・ボランティア募集	p. 11



3年間のあゆみ

●「出会い つながり 夢を語ろう」設立記念集会

2004. 5/15

参加者の皆さんから〈ほうぷ〉に望むことを聴くと、居場所がほしいという声がたくさんみられました。同じ悩みを共有できる場所、誰もが元気になれる場所、世代を超えた交流の場、ホッとできる場…活動場所を転々としながらの屋台営業ではありますが、これからもそのような場を少しずつ創っていきたいと思います。

●子育て支援 「あさひ子育ておたすけマップ」「おはなし会」「ワークショップ」

「子連れで行ける美容院は？」「待合室で遊べる耳鼻科は？」などと、ママが集めた口コミ情報満載の「あさひ子育ておたすけマップ」(2005年初版)。あさひ子育てネットワーク「きしゃぽっぽ」との協働によるマップの制作をとおして、楽しく子育てができる旭区にしたいという思いを共有することができました。2006年は城北人権フェスティバルにも参加させていただき、マップの改訂版も出版しました。「きしゃぽっぽ」とは、親子で楽しめる「おはなし会」や、ありのままの子どもを受け容れ、ありのままの自分を受け容れながら、お母さんが元気になる「ワークショップ」を共催する等の連携を重ねています。今後は、乳幼児健診への出前サークルに取り組みたいと話しています。

●障害児とその家族の支援 ボランティアとともに

〈ほうぷ〉と学生との関係を深めることに加えて、障害児と学生との関係づくりを支えるために、**ボランティア研修会→保育体験→坂井聡さんによるコミュニケーションに関する講演会→夏季レクリエーション→秋季スポーツ大会→個別支援活動**、という流れを試行錯誤しながらつくりあげました。障害児の保護者が研修講師をになうことで学生に想いを直接に伝えることや、レクリエーションの企画運営を学生と協働して取り組むなど、保護者の力を大いにお借りしての活動です。3年目にしてボランティアとの関係が深まりつつあり、ようやく個別支援活動に取り組む体制が整いました。

〈ほうぷ〉のスタッフ・尾田みどりさんによる講演を聴講した学生からは、「いのちがあることはスゴイ」「ひとりひとり違うことを大切にしていきたい」という感想が寄せられました。その翌年、Kさんの講演を聴いた学生の心には「毎年、誕生日を迎えることができるのは素晴らしいこと」「しあわせはその人が決めることであり、他人が評価してはいけない」という言葉が届きました。この3年の間に、Hちゃんは歌うことが大好きなお姉さんになり、赤ちゃんだったY君もすっかり男の子らしくなりました。

●障害児の保護者交流会 パワーアップを続ける先にあるものは？

2004年に旭区内の公立小学校に通う障害児の保護者を対象とするニーズ調査を行いました。さらに具体的なニーズを掘り起こそうと、翌年6月に障害児を育てる保護者同士の交流の場を設けました。先生との関係を含めた学校のこと、友人関係やいじめのこと、家族としか過ごせないという余暇の過ごし方、中学や高校の進路のことなど、保護者の悩みは子どもの成長

に合わせて多岐にわたります。ニーズ調査という当初の目的からは異なる次元で、「続けてほしい」という声を多くいただき、定期的に交流会やワークショップを続け、パワーアップがはかられてきました。

娘さんに障害のあることがつい最近に判ったというAさんは、交流会に初めて参加され、不安な思いを語られました。先輩ママの経験に耳を傾けながら、帰り際には笑顔を浮かべておられました。その笑顔は、子どもにパワーを与えるだけでなく、先輩ママにも、わたしたちにもパワーを与えてくれます。聴くことや語ることをとおして、自分自身の力を取り戻していく—そのような力を信じるに交流会の場は十分であり、〈ほうぶ〉はその傍らにいたいと思います。

●障害をもつ子どもたちの音楽広場

2004. 5～毎月

「近くで安価に子ども達が音楽を楽しむ場がほしい」というお母さんたちの思いを受けて、設立当初から毎月1回のペースで音楽広場の活動を続けてきました。音楽療法士とピアノ講師の2人が、毎回、たくさんの楽器を持参され、9人の子どもたちが音楽をとおして想いを表現する時間を作ってくださいました。参加児の保護者の感想から。「1年目、人や場所に慣れる。2年目、音楽を身体いっぱいを感じる。3年目、楽器に興味を持ち始め、身体でリズムを表現できるようになった。家でも音楽広場のDVDをつけてと要求、予習復習を欠かしません。」今年度は、音楽療法士2名で担当します。

●不登校児とその家族の支援 「あさひ不登校ねっと」

2004年12月、生江・両国の市立青少年会館の不登校児支援事業の担当者、不登校児を育てる親の会「サークル虹」、旭区社協ボランティアビューローの担当者、NPO 淡路プラッツ、〈ほうぶ〉が、地域で何ができるかを考えていくために集いました。現在、不登校の子どもとその家族が抱える課題を解決していくために、月1回の定例会や勉強会を重ね、家庭と学校と地域とが連携して支援していくことを目指して活動しています。構成団体は次の通りです。ほっとスペース生江、ほっとスペース両国、旭区社会福祉協議会、生江人権協会、両国人権協会、サークル虹、NPO 法人淡路プラッツ、NPO 法人地域生活サポートネットほうぶ、オブザーバー・旭区役所地域保健福祉担当。

●障害児支援・不登校児支援を考える

親ってなに？ 子育てってなに？ 不登校・障害からみえてくるもの 2006. 2/4
設立集会でのことでした。不登校体験のあるヘルパーが当時の気持ちを切々と語ってくれました。自立生活をする障害者の話を聴き、不登校の子どもに対する見方が変わったという保護者の声も聴きました。そのような声をあためて企画したシンポジウムは、障害児の親、元不登校児の親、障害当事者、不登校体験者が、それぞれの立場で思いを語りました。

現行の教育制度のなかに居場所を見つけにくく、それでもありのままのままだいようとする障害児と不登校児。そんな子どもを育てながら、親は自らを法制度にあてはめてきた生き方を少しずつ変え、自らの足枷を緩めているのかもしれませんが。生きづらさの多くが、社会や制度との〈あいだ〉にあることを改めて認識しました。〈あいだ〉のこちら側に「わたし」がいる限り、此処で語られたことのすべては「わたし」の問題であることに気づき、それらに対峙する力を得た時間でした。2005年度の活動と、このシンポジウムの内容をまとめ、講演録集『障害児支援・不登校児支援を考える』を発行しました。

●福祉教育 福祉と教育をつなぐワークショップ 2005.7/27.8/4、2006.8/3.8/7

「車椅子体験だけが福祉教育だろうか？福祉教育と一緒に取り組みませんか？」、旭区社協のTさん、Aさん、Sさんに声をかけていただき、小中学校教員、当事者の方々とともに考える場を企画運営しました。〈ほうぶ〉の大黒柱である新崎さんによる講演「福祉教育の目指すもの」の後、福祉教育をとおして子どもたちに伝えたいことについて意見を交わし、互いの「違い」を理解し合うことであるという方向性が見出されました。翌年は、加古川市立山手中学校の神吉先生による地域との協働による美術教育実践に学びました。先日、ご定年を控えられた神吉先生の授業を参観する機会があったのですが、校舎内ですれ違う中学生があまりに自然体で挨拶をすることに驚くと同時に、親御さんに混じって地域の高齢者や社会福祉専門職が教室の後ろに並び立ち、中学生にまなざしを注いでいたことが印象的でした。

●セルフヘルプグループの支援 生きづらさを抱えた人と人をつなぐ理由

〈ほうぶ〉はセルフヘルプグループとの出会いを大切にしてきました。医療的ケアを必要とする子どもと家族の「こころ」、不登校児を育てる親の「サークル虹」、脳血管障害当事者による「あさひの会」。ひとりで悩んだり頑張ったりしていませんか？同じ体験をした者同士が出会い語り合い、思いを分かち合うことで元気になっていきます。

●地域を拓く ネットワークづくり、ボランティア講座、アクションプラン etc

設立前後から、「草の根ネットワークねっこ」や「あさひ子育てネットワークきしゃぽっぽ」など地域密着のネットワークを大切にしてきました。互いの生きづらさは違っても、「家族や友人と、自分の人生を楽しく暮らしたい」という一点でなら、誰とでもつながれるのですから。また、旭区内の公共施設などが主催するボランティア講座や役所の人権研修などに、講師や託児保育の面で協力させていただきました。旭区のアクションプランの策定・実行をとおして、地域の方々と出会い、語り合うことができました。



ありがとうございました～活動をふりかえって

これらの活動を続けることができたのは、〈ほうぶ〉の活動に賛同と期待を寄せながらも、活動に参加してくれた子ども、親御さん、ボランティアがいてくれたからです。そのうちに、子どもも親御さんも運営を手伝ってくださるようになりました。心からお礼を申し上げます。

〈ほうぶ〉が単独で行なうのではなく、「一緒にやりましょう」と声をかけていただき、多くの機関や団体と協働しながら取り組んだ事業がたくさんありました。そのようななかで〈ほうぶ〉が育てられてきました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

活動にかかわる会場費や講師謝金、ボランティアの交通費、案内や会報の印刷費・通信費は、助成金とのべ150人(3年間)の方々からお寄せいただいた賛助会費に支えられました。ありがとうございました。助成金をいただいた、日本財団、大阪市民共済会、大阪ガス(小さな灯運動)、大阪府(福祉基金)、大阪市社会福祉協議会のご理解にも感謝をいたします。「あんたら、お金にならへんことを、ようやってくれているなあ。」、助成をいただいた機関への事業報告の席で、そう言われたことがあります。この言葉を〈ほうぶ〉を支えてくださったすべての皆さまに！

— 3周年記念シンポジウム —

— 地域生活サポートネットほうぶ設立3周年記念シンポジウム —



生活の場から福祉・医療・教育を考える
いのちをまなざす
いのちによりそう

2007年5月12日(土)

13:30-17:00 受付13:00より

大阪市立城北市民学習センター
講堂 参加無料 申込不要

基調講演

川口 正義 氏

「生」と「命」が紡ぎだすもの
— 子どもと家族の心象風景から

〈ほうぶ〉は子育て支援、障害児・不登校児とその家族の支援、福祉教育、医療を必要とする方々のセルフヘルプグループの支援などに取り組みながら、おかげさまで3周年を迎えました。〈ほうぶ〉の芽を地域に根ざしていくために、生きづらさをかかえた人と人が出会い、互いにつながりながら、〈望み〉をもって生きることについて考える時間をもつことになりました。いのちをまなざしてこられた方々とともに、いのちによりそう福祉・医療・教育のあり方を生活の場から考え、地域で必要とされる活動について皆さんと語り合います。多くの皆さんのご参加をお待ちしています。

子どもと家族の相談室 寺子屋お〜ぶんどあ 共同代表(静岡市清水区)/社会福祉士/東北福祉大学 兼任講師

不安と苦悩を抱き、社会による偏見と差別を受け、揺れ動きながらも、「自分らしく」生きたいと願う子どもたちと家族。その心象風景をお伝えすることで、「生きる意味」と「命の価値」について見つめ直すひと時を分かち合えたらと思っています。

パネルディスカッション

梓川 一 氏

豊かな出会い
— 難病とともに生きて

千里金蘭大学人間社会学部人間社会学科 准教授
回り道をしながら、私らしい人生を歩んでいます。うれしいこと、悲しいことをたくさん味わうことが素敵なんです。難病とともに生きながら「生」と「死」について考えてきたことをお伝えしたいと思います。夏は登山、冬はスキー、年中キャンプ、四駆オフ走行に燃えています。

向井 裕子

ありのままのいのちを育む
— 障害をもつ娘との暮らしから

地域生活サポートネットほうぶ代表(大阪市旭区)/社会福祉士
かっこわるくても、ぶざまでも、しんどくても、生き抜くことの大切さを思います。生きることの意味が見いだせなくても、ひたすら生きていけば、意味はあとからついてくる、いや……。地域の中学校に通う重度の障害をもつ娘から教えられたことをお伝えしたいと思います。

コーディネーター **鳥海 直美**

地域生活サポートネットほうぶ副代表/社会福祉士/
千里金蘭大学人間社会学部人間社会学科 専任講師

●お問い合わせ先・託児(有料)予約申込先
NPO法人 地域生活サポートネット(ほうぶ)
〒535-0022 大阪市旭区新森6-4-15-1104
TEL・FAX 06(6953)2655
Email: houpu@river.sannet.ne.jp

●主催: NPO法人 地域生活サポートネット(ほうぶ)
●後援: 社会福祉法人 大阪市旭区社会福祉協議会
大阪市旭区役所
千里金蘭大学
●助成: 独立行政法人 福祉医療機構

●会場: 大阪市立城北市民学習センター
TEL 06(6951)1324 大阪市旭区高殿6-14-6
地下鉄谷町線「関目高殿」駅下車 4号出口より徒歩3分



スタッフからのメッセージ ～ 感謝を込めて ～

「出会い・つながり・夢を語ろう」とくほうぶNPO 法人設立集会をしてから3年が経ちました。出会い・つながることの大切さは、それまでの私個人の体験からの学びでもありました。出会いに救われて、つながりの中で子育てをしながら、社会福祉を学びました。旭区の中を自転車で走り回って、たくさんの人に出会い、つながりを創ってきました。そして、この3年間、たくさんの方々に出会い・つながり・支えられてここまで来ました。感謝、感謝です。でも、3年前の設立集会で参加者のみなさんが語ってくださった夢へ近づくために、私達はともに行動することができたでしょうか。そして今、夢を語りあうことのできる地域社会を築いているでしょうか。それを思えば、道のりはまだまだ遠い…。

けれども、傍目から見れば小さな歩みでも、ひたすらに走り続けてきた3年間でした。一人ひとりのもっている力を信じ、生活の場の声を聴き、出会いの場をつくり、地域密着のネットワークを大切にしていって、地域に根ざした活動をしてきたと思っています。制度や営利に縛られることなく、カタチを自由に変えながら、必要とされるものを「あなた」と共に創りだすことができればと思っています。「あなた」がかけがえのない存在として、この地域で自分らしく豊かな人生を選び取っていくことができるようにと願いながら、そして、「わたし」が自分の人生を私らしく生きていくために、一緒にあゆんでいきたいと思っています。

「誰もが希望をもって暮らすことのできる地域社会、誰もが望まれた人として生きることのできる地域社会を目指して」と、私達自身が夢を語ることからスタートしたくほうぶの活動です。厳しい現実の前に夢をあきらめることなく、たとえ、笑われようとも批判されようとも、照れることなく臆することなく、夢を語り続けていきたいと思っています。撒いた種が芽を出し始めたことを感じるこの春に、希望の花はいつかきっと咲くと信じながら。

<向井裕子>

自ら出向くのではなく、その土地に引き戻され、呼びとめられる。自ら出会うのではなく、偶然に出会って巻き込まれる。—このようにしてくほうぶの活動を始めて3年が経ちました。旭区に初めて足を踏み入れたのは、学生時代に旭区福祉事務所で実習をさせていただいたときのこと。自転車で旭区内を走り回り、在宅で暮らす高齢者や障害者を訪問するケースワーカーやヘルパーに同行しました。あれから10数年が経った今、関目高殿駅に降り立つ回数を重ねてきました。先日、横断歩道の向こうにガイドヘルパーとともに散歩中の“のんちゃん”の姿を見かけ、互いに目が合ったその瞬間、同時に手を挙げました。わたしがこの土地に引き戻された磁力として“のんちゃん”の存在があります。

引き戻され、呼びとめられ、巻き込まれていくことが転じて、自らの意思とは違ったように流れていく生にあって希望を紡ぎ出す力になる。—慌しいばかりの3年間のうちに、このような思いが芽生えていました。昨年に催したシンポジウムで、障害をもつ子どもを育てているAさんが語りました。「(娘は)運動会になると傷だらけで帰ってくるんです」。不登校児を育ててきたBさんも囁きます。「(親であるわたしは)自分が歩んできた道しか知らない。学校に行かない生活ってどうなんだろう」。決して理解し得ない他者の生きづらさに思いを馳せながら、互いに生き生きと傷だらけでいられる関係。そのような関係を、くほうぶの活動をとおして出会った人と一緒に、ゆっくり紡いでいくことができればと思っています。なぜなら、わたしもまた、生き生きと傷だらけでいられる居場所と、希望のようなものをあたためる時間を必要としているからです。

<鳥海直美>

4年ほど前、〈ほうぶ〉を立ち上げると聞き、何らかの形で関わらせていただけたらと思っていたところ、理事という形で声をかけていただき、本当に嬉しかったのが、つい昨日のことに思い出されます。と言いながらも、この3年間は私にとって、結婚・妊娠・出産と人生のイベントごとが続き、なかなか〈ほうぶ〉に参加できていない状態でした。でも、〈ほうぶ〉の理事として居られることが、私にとって、〈ほうぶ〉と関わりを持ち続けていられるという心の支えになっています。

出産を通して、子どもを育てるということを肌で実感し、また地域とのつながりの大切さを実感することができました。そうした中で、〈ほうぶ〉の、同じ思いを持った人を結びつけ、地域をよりよくしていくという活動の意義をより一層感じています。人が人を支え、その支えた人をまた誰かが支えていく・・・そんな人とのつながりの輪を広げることのできる素晴らしい地域づくりのお手伝いできればと思います。私も一緒にがんばっていきます！

<Puku ママ>

〈ほうぶ〉は、「地域生活サポートネット」として「豊かな地域社会づくり」と「質の高い生活」の実現を目指して、2004年4月に設立した。

私の行動理念に「いと小さき者ひとりのために」がある。この言葉は、阿部志郎がボランティア精神を表現した言葉である。〈ほうぶ〉のかかげる障害がある人々の社会参画や生活のしやすいまちづくりの実現を目指した「地域生活サポートネット」の構想に共感し、少しでも役に立ちたいと考える〈ほうぶ〉の活動に参画している。他のメンバーの想いも同様であろう。

私は、〈ほうぶ〉の活動の中でも、主に福祉教育という文脈で関わらせていただいている。

最近、学校におけるいじめによる自殺の事件報道が後を絶たない。私自身は、福祉教育に関わってきた人間として、人間の尊厳を基盤に置いた福祉教育実践が、危機的状況にある教育現場に対して十分機能していない点について猛省している。子ども達を護り育むのは学校教育だけではない。家庭教育や地域教育も重要な役割を持つ。学校教育現場における逼迫する危機的状況を鑑みると、福祉教育実践は、学校教育の枠を広げ、地域教育や家庭教育の分野とも協働することが求められる。いじめによる自殺が後を絶たない現状は、障害がある人々を排除する社会ともつながる。だからこそ今、〈ほうぶ〉が掲げる「地域生活サポートネット」の発想を、学校における福祉教育実践の中に取り入れることを模索してきた。旭区での福祉教育実践は、2年目を迎えた。①福祉教育の目的と手段の明確化を図る、②旭区でのターゲットを絞りモデル校をつくり、先生と一緒に考え実践していくという、2つ目標を立て社会福祉協議会との協働実践を行ってきた。しかし残念ながら②については、地域の学校や教師との具体的な協働実践をどのように展開していくかという課題も残った。今後も学校関係者に対する継続した働きかけを行っていきたいと考えている。

〈ほうぶ〉と共にめざすもの <新崎国広>

〈ほうぶ〉設立3周年にあたり、〈ほうぶ〉にかかわる医療職としてひとこと書き添えたいと思います。私自身、病院助産師から地域に出て、日々多くの子ども達・人とかかわる仕事に携わってきました。そんな私が〈ほうぶ〉の設立スタッフ達と出会い、〈ほうぶ〉が生まれる瞬間に出会い、〈ほうぶ〉と共に育ってきている自分を感じるこのごろです。医療職として地域の中で当たり前のように日々をすごしていると、人はみな地域の中で暮らすことが自然体で、町の風を匂いを肌で感じて日々をすごし、どんな医療行為も生活の一部として生活の中にあり、寄り添う人たちが自然体でかかわることが本当に必要なことと感じています。地域の中でほほえみとやわらかさの中で育ってきた〈ほうぶ〉と共に、生活の匂いの中で、生きている大切さをこれからもつなげていきたいと思っています。

<今村千晶>

私は〈ほうぶ〉の社員です。我が家にはダウン症の長女と重度心身障害の次女がいますが、2人の子どものために〈ほうぶ〉に参加したわけではありません。「(代表の)向井さんと遊べる！楽しそう」と、自分のために入りました。

3年経って見わたせば、〈ほうぶ〉の障害児余暇イベントを心待ちにしている長女と長男がいます。向井さんの娘さん、のんちゃんお姉さんを友だちだと思っています。

先日、次女が入院して長女長男の心が不安定になったとき、〈ほうぶ〉で知り合ったボランティアのお姉さんたちに遊んでもらいました。若くて元気な大学生のパワーをもらって子どもたちは復活。母も励まされました。

「私は旭区民じゃないから〈ほうぶ〉に入っても自分のメリットはないだろう」と思った私が甘かった。今ここで生きる私をサポートしてくれるのが〈ほうぶ〉でした。支えあうことを感じながら活動に参加しています。〈ほうぶ〉3周年、これからもよろしく。

<尾田みどり>

地域でボランティア活動をする中で、障害児から高齢者まで、いろんな方と関ってきました。〈ほうぶ〉の活動の他にも、いろんな会と関ってきました。例えば、あゆみ会の活動。毎月第3日曜日に学園児(施設で生活をしている児童生徒)のアウティングなど。45年前から、時代に合わせ形を変えながら活動を受け継いできました。現在は5~7名くらいのボランティアで子ども達と楽しく遊んでいます。

4月から高齢者(60歳以上)大阪市就労的生きがいづくり助成金交付を受け、会員の出資金と合わせ、パン作りを習い、販売しようと動き出しました。年齢や障害の有無を問わず、住み慣れた地域での人の輪づくり、生活の場づくり、将来的にはグループハウスづくりの第一歩にしたいと「あかずきんちゃん」が誕生しました。〈ほうぶ〉とのつながりもできるといいな。

一緒に楽しむ仲間が増えていくことを期待しています。

<菊永>

私は〈ほうぶ〉の活動の中で、「あさひの会」というセルフヘルプグループ(脳血管性の病気により50代を超えてから、お体が不自由になられた方々の会)にかかわらせていただいています。「あさひの会」は、会員(当事者)の皆さんのマイペースでのんびりとアットホームな雰囲気、毎月第2月曜日の午後2時から集まれて、近況報告やイベントの相談などされています。「あさひの会」立ち上げのきっかけは、私が仕事で関わっていた男性と奥様との出会いでした。当時、その方は突然麻痺をもつ体になられたことから生きる力を無くされ、家族の皆様がこの現状にどう挑めばいいのか、途方にくれておられました。「私に何が出来るのだろうか」と悩んでいた時、向井さんと出会い、中途障がい者のセルフヘルプグループを立ち上げることになりました。それが4年前。その1年後に〈ほうぶ〉がNPO法人の設立をしました。その後の〈ほうぶ〉の地域への貢献については、他のスタッフの皆さんが報告されての通りです。私はといえば、仕事にかまげて3ヶ月に1回程度しか顔を出せていません。私自身の転職もあり、今後ますます「あさひの会」への参加も難しくなると思われませんが、この「あさひの会」が大きく発展されることは願ってやみません。いえ、たとえ少人数でも、同じ思いをもつ方同士、力強く支えあいながらリハビリや余暇を楽しんで取り組み、力を分かち合える、そんな仲間の集う場所として継続されることを強く願っています。

<脇田寛史>

保育所の保護者会のつながりから、〈ほうぷ〉へのお誘いをもらって、それから、私はあまり役には立てていないなと思いながら、3周年なんですね、もう。

私は教員として、学校教育の中でできることに、当然、教員としての理想と自負を持っています。が、地域の活動や底につながる家庭の力の大きさに気づかされた3年でした。「もっと学校が門を開いてくれたら…」「もっと学校と連携できたら…」という地域や保護者の願いは、そのまま学校サイドである私への要求であり、一方で地域に生きる私の願いでもあります。どちらの私が受け止めるべき言葉なのか、悩ましいときもありますが、地域で生きる私が、学校現場での私に間違いなく伝え、実践に生かしていくことができればと思います。

これからの〈ほうぷ〉への期待は…。地域子どもや保護者にとっての(私にとっても)居場所であるように、存在し続けたいですね。喫茶〈ほうぷ〉や弁当屋〈ほうぷ〉の夢も、どっかで追いかけてながら。

〈中川ゆう子〉

〈ほうぷ〉のスタッフの中で唯一、医療・福祉・教育の専門職ではない私です。情報処理の専門職(システムエンジニア)の私が、なぜ〈ほうぷ〉に関っているか？それは「娘」が居るからです。娘が産まれた時、私は、その重い障害に慌てふためき泣いた、本当に情けない父親でした。それが今や、娘とあちこち出かけるのが楽しみとなり、障害児の親の会の役員などもしています。こんな私でもちゃんと(?)父親になれる(娘が育ててくれたのですが)ことを知っていただければ、若いお父さん達も少し安心するかな、なんて思っています。〈ほうぷ〉の活動に、ぜひ「お父さん」達もご参加ください。

NPO 法人設立当初からホームページを作成すると言いながら3年が過ぎてしまいました。関係者各位には本当に申し訳なく思っている次第です。今年の夏までには立ち上げたいと思いますので、みなさん、少しだけ期待して待っていてください。

〈ひろし〉



ボランティアからのメッセージ ～ 期待を込めて ～

- ・ 初めて「ほうぷ」のボランティア活動に参加したのがスポーツ大会でした。その時、さまざまな障害をもった子ども達を目の前にして、戸惑いはありましたが、遊んでいるうちに戸惑いなども忘れ、自然と溶け込んでいき一緒に遊んで楽しかったです。
- ・ 個別のボランティアでHちゃんのお家に遊びに行った時に、弟のJちゃんがハムきゅうりサラダを作ってくれました。私たちを受け容れてくれているのだなと実感できた時でした。嬉しかったです。
- ・ 子ども達と触れ合うだけではなく、保護者の方々からいろいろなお話を聞いたりおしゃべりしたり。保護者の方とのふれあいがあれば、学生として勉強になるという思いがあるので、これからそのような機会があればなあと思います。

大学2回女子学生達

「ほうぷ」のイベントに参加して、一番強く感じたことは「あったかき」でした。

重度の知的障害をもつ方に対して、僕らは行為の結果ばかりに目がいき、その過程(行為にいたる心理的葛藤など)を見過ごしがちです。(自身の経験で言えば、僕は東大阪にある自閉症やダウン症の方々が暮らすグループホームに世話人として働かせてもらっているのですが、頻繁につまみぐいされる人がいるので注意するのですが、同じ世話人仲間の先輩に「つまみぐいをするまではつまみぐいを我慢してたのかもしれないよ?」と言われ、すごく反省しました。)

「ほうぷ」に関わる人達には、いつもお互いを尊重するという、あったかい雰囲気を感じます。あったかい雰囲気は前記したような過ちの防波堤になると思うのです。相手を尊重するからこそ、ありったけの思いやりと過不足ない援助。それこそ全ての人と一緒に生きる社会にとって必要なのではないのでしょうか？

大学のボランティアサークル男子学生

昨夏に、「ほうぷ」主催のボランティア活動に参加したのが「ほうぷ」との出会いでした。

「ほうぷ」スタッフの自然体で大きな心持の人柄に心地良さを感じ、他のボランティアの紹介を願い出て、T君の学習指導を紹介してもらうこととなりました。

T君は高校受験前ということもあり、この時期に始めて受験に間に合うのか不安でしたが、楽しんでやって欲しいとの希望でもあり、引き受けることにしました。初めは学校で習った復習を中心にゆっくりとやっていたのですが、本人の希望もあり、後に高校受験を目標に進めていくことになりました。そうなると3年間分の総復習が必要で、この半年間でできることは？と考え、まずはT君得意の数学の計算問題を中心に取組み、次に過去の受験問題を確認すると、T君得意の計算問題が少なく数学でも文章理解が必要となることが分かり、読解力を伸ばすためT君が一番苦手とする国語中心の学習に切り替えることとなりました。国語の学習を通じて、数学の文章問題や国語の説明文等への抵抗が多少薄れたように感じました。受験を通して得た合格という喜びにとどまらず、高校に入学してからもいろいろなことを学ぶ中でできなかったことができる喜びを得て、楽しく過ごして行って欲しいと思っています。

社会人ボランティア

— お互いのために —

私は、「ほうぷ」で初めて障害を持った子どもさんと触れ合わせていただきました。最初は、1人1人のわかること、わからないこと、できること、できないことに気をとられ、彼らの個性や訴えていることに、気がつけずにいました。しばらくして個々の活動をさせていただき、1人の女の子に出会いました。私が出会った女の子は、私が今まで出会ってきた人たち、子どもたちと同じように、好きなことがあり、好きな食べ物があり、興味のないことがあり、出来ないことがありました。これが「個性」なのかと改めて気づかせていただきました。

私にとってのボランティアは、お互いが成長しあうことだと思っています。これからも、受ける側、する側、両方の将来にとって、ためになる活動をしていただきたいと思います。

大学4回女子学生